



馬耳東風

今年もまた暮れようとしている。毎年そうであるが、過ぎ去った1年は本当に短く感じられる。ほとんどの人が高齢化するとその感覚が一層顕著になるようだ。「歳をとった」と感じた時から時間が速く過ぎるとも言われる。かつて英国の哲学者ベーコンは「若い時は1日は短く1年は長い。歳をとると1日は長く1年は短い」と言った。確かに若い頃はあれやこれやと忙しく働き、仕事を終えて帰るとき、1日が短く感じられた。時間に追いかけていた頃は1年を振り返るともう1年過ぎたのかと短く感じはしたものの、歳を重ねた今、感じる1年の時間感覚とは明らかに違う。この時間感覚は年齢、仕事、生き方など今の生活条件の違いによりかなり個人差があるようにも思えるが、洋の東西を問わず共通したものらしい。

なぜそのように感じられるのか、体感時間の年齢反比例仮説、加齢に伴う効率低下仮説、ルーティン仮説など、諸説が有りまだ定まった見解はないという。定説が無いから話の種になりやすいであろうが、その中に、高齢になると感動することが少なくなり、後日振り返ったとき記憶に留まっている出来事が少なくなるからだろうという説がある。この説には感覚的に賛成出来る気がす

る。喜怒哀楽いずれにしろ、人は誰しも強い感動を伴った出来事ほど印象強く、鮮明に記憶に残ることは確かである。感動は「予想・期待」と「実際・体験」の落差で生じると思われるが、加齢に伴い多くの事を経験したことで感動の閾値が高くなり、少々の出来事では感動しなくなる。これが新しい記憶が残らなくなったと感じる理由の一つのように考えられる。遠い過去の引き出しにはびっしり詰まった記憶も、最近の引き出しは開けても空っぽということでは、古い記憶は容易に甦るのにごく最近の記憶は思い出そうにも何も無いということになる。ただ、感動は理屈ではなく、感動出来るか、否かそれ自体は個人の感性の問題によるものとも思える。仮に80歳まで生きられるとすると、余すところ12年、4,380日、これしか残っていない。こんな計算をすること自体歳をとった証拠であるが、この余生、毎日感動するほどの出来事に出逢う事も無かろうが、様々な事に好奇心を持ち、出来るだけ変化のある生活を送ることを心がけ、感情の老化を防ぐことで、時間の流れを少しでも遅くすることが出来るのではないかと勝手に想像し、期待している。「満ち足りた1日は幸せな眠りをもたらし、充実した一生は幸せな死をもたらし」これはレオナルドダビッチの言葉という。1日が短かろうが、長かろうが、早くこの境地に近づきたいものである。 (青)